

こうち、(再) (新) 発見!

TOSABUSHI

# とさぶし

【第4号】  
二〇一三年

TAKE FREE



目次

特集 船出のとき

とさ印 Rなイス

せがれ 森田潤(森田ネーム)

Oh縁メッセージ 小川糸

戦国元親くん 神だのみ

でんづきでんづき よさこい祭り

アゲアゲ天国 手結餅

伝説探訪 二十日念仏

とさぶし調査隊!ぶしーず 畜産総合科の犬  
とさぶしお知らせコーナー

TOSABUSHI 第4号  
とさぶし 2013年

はみだし企画満載! web限定コンテンツ

web版 “あだたん”  
<http://tosabushi.com>

電子書籍でも  
見ることができます!

電子書籍版、配布場所は上記HPをご覧ください iPhone、iPad、Android対応!

facebookもやっています!  
<http://www.facebook.com/tosabushi>

発行  
高知県文化生活部文化推進課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)  
Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296  
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp  
発行日:2013年9月24日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会  
制作 南の風社

バックナンバーの入手方法  
お近くに配布先がない場合は、送料分の切手を送っていただくと、  
受取次第発送をいたします!

【送料】  
1冊・2冊 180円  
3冊 210円  
4冊・5冊 290円

6冊以上の場合、一度ご連絡ください。

お問い合わせ・送付先は、高知県文化生活部文化推進課(上記)まで。

「土佐あかうし」(褐毛和種高知系)は、明治時代に農耕用として高知にやってきた  
韓牛をルーツに持つ。穏やかな性格で、暑さに強いこともあり、多くの農家で愛された。  
現在は、肉用の和牛として飼育され、うまみの多い赤身に人気上昇。



高知海洋高校は各種の航海実習を行っている。今回、実習船・土佐海援丸に乗り込んだのは、船舶職員を目指す1年生9人。社会人の船員と、卒業してもなお船で学ぶため専攻科に進んだ9人の下で、船の仕事の学び、船の生活に慣れることを目指す。「先輩の動き、よく見ておけよ」と、実習担当の阪口勝俊先生(49)は生徒に声をかける。

海洋高校は、所狭しと漁船が並ぶ漁業の町・土佐市宇佐にある。平成9年に室戸岬水産高校、高岡高校宇佐分校、清水高校漁業科が統合され、県内唯一の海洋系高校としてスタートした。

生徒は、航海・機関・食品の3つのコースに分かれ、技術を磨き、資格取得のための勉強をしている。捕鯨船や自動車運搬船の船員、ドックの技術士、料理人など、卒業生約1200人が各方面で活躍している。

## 海のプロを育てる より専門的に



目の前に大海原、背後に森林が広がる高知県は、47校の高等学校がある。土佐湾に隣接する高知海洋高校と森の中にある四万十高校の生徒が、同じ船に乗って屋久島を目指すという。自然の中で学び成長する若者たちを追った。



1年次に70人全員が参加する航海実習を経て、航海・機関コースに進むと、2年次にハワイ沖で延縄漁をする2か月の遠洋航海実習があり、3年次の習熟航海へと、経験を積んでいく。

### ツナガール

2年生がハワイ沖で釣り上げたビンナガマグロは、食品コースの生徒が缶詰にして販売する。ホワイトミートと言われる高級ツナ缶は、文化祭で長蛇の列ができるほどの人気商品だ。「うちには、華麗な捌き手(48)は目を細めた。



白い帽子と前掛けをつけた食品コース3年の藤田由真さん(18)は、マグロの加工実習で解体を担当する、通称ツナガールだ。身長151cmの小柄な彼女。「セー」の掛け声で、約30kgのマグロをまな板の上に置いた。丁寧に鱗を剥ぎ、内臓を取り除く。包丁捌きに迷いはない。隣の部屋では他の生徒が、切り身を蒸し、小骨や血合いを取ってほぐし、缶詰に詰める。

藤田さんは、須崎市浦ノ内中学校出身。料理が好きで、海洋高校に入学した。部活は食品科学部。「この前、すり身天をつくりました。板前さんが学校に来てくれることもあるんですよ」。

家族はミヨウガ農家を営む。最盛期の夏は、学校から帰るとミヨウガのバック詰めを手伝う。「将来のこと、作業しながらしゃべるんです。普通科の学校よりも技術が身につけているはず、ってお母さんは背中を押してくれます」。夢は、和食の料理人。学校で学んだ手捌きを活かしたい。

### 2日目 DAY 2



海上の朝は早い。「明るいな」と思って目を覚ますと早朝5時。6:45に船内放送でNMB48の「北川謙二」が流れ、デッキでの集合を知らせる。

朝起きたら  
土佐清水沖を過ぎていた。  
今日も1日、海の上。



「うわぁ、真っ赤な夕日が興津に沈んでいくよ」。四万十高校の福井先生と威能くんが歓喜の声を上げる。日は沈み、濃紺の海に、月がオレンジ色の光を放つ。



ワッチの合間にデッキで休憩する、海洋高校養成課程の田中くん、鎌田くん、宮田くん。青空を仰いで、気分爽快!



船は4キロほど沖合に出ると、西に舵をきり、海岸線に沿って進んでいく。「あ、トビウオ!」。声の主は、四万十高校の山脇くん、海洋高校専攻科の堀口くん。



「今、このあたりです」。15分おきに海図に位置を記す海洋高校生。四万十高校生は、説明を聞いて「へえ〜」の声。見慣れぬ機械に興味気味。



海洋高校生は4時間交代でワッチ(航海当直)に入る。ブリッジでは、双眼鏡を使って海上をチェック。



7月22日14:00 土佐海援丸が高知港から出航。四万十高校自然環境コース1年生の8人と、高知海洋高校養成課程1年生9人、専攻科9人が乗り込んだ。

### 1日目 DAY 1



ブォー~~~~。土佐海援丸はひととき大きな汽笛を鳴らし、まるでスローモーションのように高知港から離れ、桂浜を越えて海に出る。7月22日、晴れ。目指すは、屋久島。往復約900kmの船の旅だ。



口をそろえる。「答えは屋久島にある」と前島先生は直感した。

幸運にも翌年、全国高校生自然環境サミットが屋久島で開催されることになり、生徒を引率して参加することができた。森を歩いて、屋久杉と共に生きてきた人の営みを目の当たりにした。帰る途中、生徒がぼつりと言った。「屋久島、なんか違うよね」。前島先生は、地元を飛び出すからこそできる経験だと確信した。

さっそく、森・川・海のつながりを学ぶ屋久島研修の企画書を学校へ提出した。県の実習船を活用できないかと相談すると、事務長が交渉に動いてくれた。実習船を活用したいという海洋高校の思いと重なり、平成15年度に念願が実現した。

**屋久島をきっかけに**

「屋久島研修は1年生で最初の滞在研修。うまくいくと、いいスタートが切れるんです」。前島先生は卒業生を紹介し



## 自然を活かす 人を育てる

### 森から海へ



「今回は、僕たちのために屋久島まで船を出してくれてありがとう」  
ざいます」。四万十高校1年の威能運くん(16)が船長にあいさつした。四万十高校生8人の代表として、点呼やミーティングの司会を務める隊長だ。

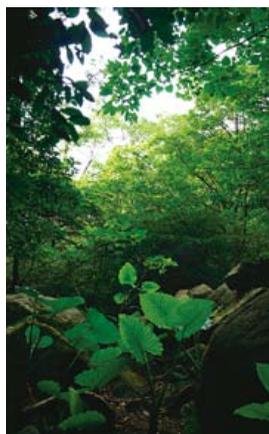
デッキで海風に吹かれている福井ひろ子先生(36)は、「人生の大事な時期に、学校ではできない経験をしてくれたら」と、この実習の担当者として今回の研修に期待する。

### 学びの鍵を探して

四万十高校は、良質なヒノキの産地の旧・大正町にあり、戦後、窪川高校大正分校定時制の林業科として開校した。その後、全日制ができ、大正高校として独立したが、ピーク時から生徒数の減少は続いた。

「このままでは過疎化で学校が沈滞する」。平成11年、校名を「四万十高校」に変更し、新たに自然環境コースを設置した。「四万十」環境教育」を全国にPRし、1期生30数人が入学した。

平成13年度に赴任した前島正二先生(50)は物理専門で、自然や生物については門外漢だった。まず自分が学ぼうとリサーチを始め、福岡県の柏陵高校を視察した。「生徒が放課後に自ら研究活動を行っていて、とても生き生きとしていました。休日でも、自主的に水生生物の調査をするという驚きでした」。その生徒たちに話を聞くと、「屋久島研修が楽しみで入学した」と



てくれた。

「屋久島の原生林に入って、これが本物か」と、正直、劣等感を感じました」。林浩史さん(23)は、7年前の屋久島研修を振り返る。旧十和村の山間の集落で生まれ、祖父が作る炭やシイタケ栽培などを手伝い、山を駆け回って育った。「この四万十の山や川はきれいな」という思いに、疑問が湧いた。

2年の夏休み、友達2人を誘って参加した県外の環境研修会で刺激を受け、「自分たちも何かやりたい」と、小学生からお年寄りまで幅広い世代と四万十の環境を考える学習会を企画した。「まず自分たちが四万十の環境問題を解決できる存在になって、それを地域に広げていきたい」と、仲間を集め、地元企業に協賛を募り、開催へまっしぐら。周囲の大人には「今までやったことがないし、無理だ」と止められたが、30人以上の生徒を巻き込み、100人以上が参加するイベントを実施し、四万十の環境問題を知ってもらうことができた。

卒業後は保育士になろうと考えていたが、もっと自然や環境のことを専門的に学びたいという気持ちが勝り、筑波大学に進学した。現在は、県内の環境系の企業に就職し、川の水質や大気汚染を調査する日々だ。「ずっと自然に関わってきたい」。一度点いた灯は燃え続けている。



たとえ船酔いして動けなくても、朝7時の点呼は絶対。体操で体を目覚めさせ、船内の掃除をする。終わったら、朝ごはん!



本結び、8の字結び、一重つなぎ……船上で必須のロープワークを学ぶ四万十高校生。「これは登山でも役立つんだよ」と、四万十高校の小笠原先生。



「屋食の時間」と船内放送が流れると、お腹を空かせた生徒たちが集まってくる。「姿勢、礼。いただきます」。海洋高校養成課程の榎上くんは、ハンバーグを2段重ねにしてご満腹。



「あ、見えてきた」と四万十高校の8人が指差す、屋久島。「種子島より、高さがあるね」。デッキで話をしながら、上陸を待つ。



18:30、予定通り屋久島に上陸。安房地区の宿に着くと、登山に向けて目標を出し合う。最後は、登頂のポーズを練習。一番右の谷脇くんは、太忠岳の巨岩を表現。

### 3日目 DAY 3

海洋高校の生徒と別れ、四万十高校生は山頂に巨岩がそびえたつ太忠岳へ。登山をしながら、屋久島の森や植生を学ぶ。



標高約1000mのヤクスギランドまで車で登り、朝ごはんを食べて、ストレッチで体をほくして登山開始! あの山の、てっぺんまで登ります!



「杉の葉は、どうしてこんな形かわかる?」と、ガイドさんがクイズを出題。らせん状になった葉を拾ってじっくり見て、「……光合成?」と高橋さん。「正解!」



がじゅまるの木の中で。よるよると枝を伸ばして木に巻きつき、養分を得て生きる着生植物は圧巻だった。

5日目  
DAY 5

土佐海援丸は、黒潮に乗り、風を味方につけ、高知に向かう。13時 高知港に着岸した。



4日目のフィールドワークを終え、再び土佐海援丸へ。屋久島を見つめて、名残惜しそうに手を振る。「屋久島、バイバイ。また来るね」



「すごい水しぶき!」。水量が多く大迫力の大川の滝。細かい水のシャワーを全身に浴びると、自然と笑顔になった。



マングロープの保護について、ガイドさんの説明をしっかりと聞く伊與木さん。樋口くんは、自慢のカメラで激写!

4日目  
DAY 4

前日の登山でくたくたの四万十高校生。栗生のメヒルギ、大川の滝、西部林道を回り、再び船へ。



岩の上に腰かけて、お弁当を広げる。ガイドさんは、バーナーでお湯を沸かし、お味噌汁を入れてくれた。一口飲むと、ふっと疲れが吹き飛ぶ。



片道約4時間半で太忠岳に登頂! 朝からの曇り空が一転、晴天に。気持ちいい青空に思わず叫んだ。「やっほー!」



この岩が、太忠岳の最後の難関。一人ずつ、ロープをしっかり握って登っていく。「がんばれー!」と仲間の声。



森は屋久杉だらけ。上を見上げると、緑色がまぶしい。少し歩くと、千年杉が見えてきた。倒れた木からは新しい芽が出て木が育っている。これが倒木更新だ。

力を合わせて

四万十高校生は、宿

で翌日の登山の目標を出し合う。「頂上まで登れるか、心配

……」と不安の声が漏れる中、「心を一つ

にして明日に挑んでほしい」と福井先生。威

能くんは「全員で登る。ONE for ALL, ALL

for ONE」と宣言した。

朝5時起床、標高1497mの太忠岳に

真新しい登山靴を踏み入れる。「あれが千

年杉、こっちは倒木更新」とガイドさん。

遊歩道が終わり、傾斜のきつい山道にな

ると、おしゃべりが途絶える。湧水を汲み、

梅干を食べて、休憩をとる。岩場の多い山

道を手を取り合い登っていくと、巨大な岩

が姿を見せた。両手でロープを握り、腰を

落とし垂直の岩を登りきると、ぱーっと眼

前が広がった。種子島の向こうの海まで見

渡せる。前日練習した登頂のポーズで、み

んなで記念撮影した。



フィールドで学ぶ

翌日、屋久島をぐるりと

回るフィールドワークに出

た。栗生集落でバスを降り、

マングロープ地帯へ歩いて

いく。「あれが島バナナ、これ

はリンゴツバキ」とガイドさんが道

すがら教えてくれる。生徒たちはカメラを

向け、メモ帳を取り出し、書き記す。

「これがマングロープの一種のメヒルギで

す」。川の河口付近に石垣があり、海面から

緑色の葉がかすかに姿を見せる。

「え?」。8人はポカンとした表情

で、続く言葉がない。「昔はもっ

と生い茂っていたんですよ」と、

ガイドさんが20年前の写真を取

り出した。そこに石垣はなく、メ

ヒルギが群生していた。「人が快

適に暮らすためのものが、自然の

姿を変えてしまった。みなさんは

川の調査をやっていると聞かま

したが、四万十川はどうですか?」

8人は固まってしまった。どう答

えたらいいのか、宿題を持ち帰る

ことになった。

夜のミーティング

「相当苦労したけど、精神的にも強

なったと思う」「屋久島で見たこと、聞い

たことを、授業の中で発言していきたい」

「葉っぱや種をもらえてうれしかった。趣

味の植物採集に力を入れていきたい」「地

元の川崎市は身近に自然がないので、ずっ

と四万十に関わっていきたい」。彼らは初

めて自分の「将来」について口を開き、こ

の体験をどう生かしていくか、考えを出し

あった。

福井先生は声を詰まらせながら、「苦労し

て登った太忠岳ですが、広い地平線の一点

にしかすぎません。それは、自分たちもそ

う。一つの点として生きていく。だっ地球の中で、自分もあなたも一人しかない。だから自分を大事にしてほしい」と、エールを送った。

屋久島研修——海洋高校と四万十高校の生徒たちは、5日間、海と向き合い、自然と向き合った。

16歳の彼らは、数年後社会に出る。そこは荒波で、いろんな困難が待ち受けているかもしれない。航海の技術を身に付け、「ずっと自然に関わりたい」という気持ちを芽生えさせ、それぞれ自分の「将来」に向けて一歩を踏み出した。



これが太忠岳の頂上!

リンゴツバキ



おばちゃん、ちよっと  
おめに入れてよしく!!

ラーメン待ちの男子学生  
（撮影場所・高知県立小津高等学校の食堂）

男子  
拉麵

森田ネーム代表

森田潤じゅんさん

祖父の店を継いだ森田潤さん。「99%」コンピューターミシン」と言われるミシンの刺繍業界で、古風なミシンを操る。店の外にミシンを持ち出し、身近なものを宝物に変えている。

名機を操り  
ネームを刻む



その四  
とさ印

「高知市立養護学校」の  
Rなイス

愛用者 寺山 亜希さん (デザイナー)

なかなかNice!

シンプルなデザインと、この曲線に目を見張りました。そして、1脚2,500円(税込)という破格の値段。自宅のリビングに置きたいなあと思い、迷わず買って帰りました。

座面が縦方向にも横方向にも曲線。座るとおしりにピタッとフィットするので、背もたれがなくとも、姿勢よく座れ、疲れません。

高知市立養護学校高等部・木工部の手作りのイス。高知県産のヒノキを使い、一つひとつ電動のこぎりで切り出し、丁寧に磨いて作られる。年1〜2回開催する市養市の他、高知市本宮町のカーニバルコーヒーでも展示・販売をしている。



「ミシン刺繍は一人前になるのに、10年かかる」と潤さん。教えられたことの意味に、数年経って気づく時、「今は亡きおじいちゃんと違って、会話しているような気分になるんです」

たミシン屋さん聞いたんです、このSINGERのミシン、どこで買えますかって」。中古品が見つかり購入したものの、うまくコントロールできず、倉庫に眠らせていた。

しばらく経ち、柔道着の名入れが舞い込んできた。祖父から譲り受けたJUKIの横ぶりのミシンは、分厚い生地針が通らず、何度も折れる。その時、黒いミシンのことをふと思い出した。「ひっぱりでしたら、厚物の生地にすんなり名前が入る。じゃじゃ馬やけど、ちゃんと使いこなしたい」。祖父が晩年使っていたJUKIは音も静かで、縫いあがりもきれい。「こつこつ作業したら、しゃっしゃ、しゃっしゃ



柔道着などは数あるミシンの中から、厚物に強いSINGERミシン取り出し、名前を入れる。



体育館などに使われる縦縞の校章は、直径50cm以上。数十mもの縦縞を畳んで肩に担いで刺繍することも。



色とりどりの刺繍糸は、400色以上。おじいちゃんの時代は、12色ほどしかない上、白地でも黒地でも映える「金茶」がほとんどだった。

大学を卒業した22歳の春、祖父の下で働きはじめた。休みなくミシンを踏む祖父を手伝い、仕事の合間にミシンの練習をした。「おじいちゃん、まさにいじょうそう。孫だからといって教えてはくれない」。練習して上手にできたものを見せても、よく見もせず「上等よえ」の一言。もっと褒めてほしいと悶々としていた。

### 祖父から受け継ぐ

潤さんは、中学生の時、ネーム店を継ぐと宣言した。「おじいちゃんが喜んで、わしの孫が継ぐがやと」と、まわりの人に言いふらしたそうです。店の隣で化粧品販売店を営む父は、「人と話ができる、商売の道に進みたい」と継がなかった。「でも僕は、おじいちゃんみたいに黙々と作業する仕事でしたかった。人と話すのも得意じゃなかったし」。

仕事が進むんですけどね。でも、あってSINGERを踏む」。音に、振動に比例して、不思議とテンションがあがっていく。

SINGERの横ぶりのミシンは約80年前のもので、今は生産されておらず、修理できる人は少ない。「思いっきり踏むため、全国の中古品を探してストックしてあります」。黒いミシンとの付き合いは10年になる。

### 老舗ネーム店

高知市廿代町の小路に、森田ネーム店がある。店に一步足を踏み入れると、黒いミシンがごろごろと何台も置かれている。これは針が左右に振れる刺繍用の「横ぶりのミシン」。縫製のミシンと違い、送りや押さえがない。皺にならぬよう指先で生地をピンと伸ばして自在に刺繍するには、熟練の技が必要だ。森田潤さん(40)は、足元のペダルで速さと振り幅を調節し、立体感ある文字や模様を描く。

昭和初期、高知県に初めて横ぶりのミシンを持ち込んだのが潤さんの祖父だった。誂えの洋服店が数十軒あった帯屋町に近い廿代町で開業し、「腕一本で仕事を取ってきた」と潤さんは誇らしげ。スーツの裏地、制服や作業服の胸ポケットなど、洗っても消えないネーム刺繍は、洋服の普及と共に広がり、ネーム店が相次いで創業した。

### 名機との出会い

「なにこれ、かついい」。刺繍業界の偵察にと訪れた大阪のミシンショーで潤さんは、職人が操るアメリカ生まれの黒いミシンに釘付けになった。「見た目も、ガチャガチャした音も。完全に心を奪われました。会場にい



鳴子やミシン、足の生えたオタマジャクシ、お寿司など、ユニークなくるみボタン。

女の子は、じつと針の動きを見つめる。「い」の字を書き終わるまで、わずか数十秒。余分な糸を切って手渡すと、女の子は、はにかみながら、自分のポケットを受け取った。

高知市帯屋町のおびさんロードで2か月に一度開催されるおびさんマルシェでは、通学時にスボンやスカートに取り付ける「移動ポケット」が人気。



よさこい踊りの衣装につけるボタンを買いに来た親子。

高知市帯屋町の石畳の通りに、「おびさんマルシェ」の市が立つ。ネックレス、野菜、器、消しゴム判子……食とアートの蚤の市。

小学生の女の子とお母さんが黒いミシンのある店の前で足を止める。チョコクや水玉や動物柄の中から、茶色の水玉の「移動ポケット」を選んだ。「名前は、あいです」とお母さん。店主は、女の子に「何色が好き？」この生地には、このピンクはどう？」と声をかける。女の子がゴクつとうなずくと、店主はミシンに糸をかけ、ダダ、ダダダダダダと「あ」を刺繍した。



店の前で、おじいちゃんと。唯一のツーショット。

入社して4年、祖父が他界した。潤さんはお客さんに納品した経験がほとんどなく、難しい字に当たると、嫌々ミシンを踏んでいた。「たとえば藤とか久とか、バランスがとりにくい。お客さんも下手くそやなっと思っただけでしょうね」。店から一歩も出ず、ただひたすら仕事を待つ日々。「ぼーっとして、来た仕事だけ受ける。曇った目をしてたと思います」。

32歳の春、近所のネーム店の主人が亡くなった。入学シーズンを控え、スポーツ店の店員が血相を変えて駆け込んできた。「ネーム入れ、千枚、お願い！」。動悸がした。それでも、納期に間に合うよう、徹夜して必死で名前を入れた。「なんのこれしき、って自分に言い聞かせて」。次第に学校関係の仕事が増え、コンピューターミシンを購入した。息子が生まれ、これからの生活を考えた末の答えだった。成章やロゴなど、忠実さを要求されるものはコンピューターで、一人ひ

とりの名前は横ぶりミシンで入れる。春先の数週間は、店の中に体操服が溢れ、1日500枚のペースで名前を入れ続ける。「手作業のあたたかさは、コンピューターには出せない。きれいに揃ってなくて、糸目がぎこちなくとも、そこが人間らしいところ。最後の横ぶりで職人になって、辞めずに続けていると思います」。

### ミシンを街に持ち出して

35歳の夏、転機が訪れた。友人に誘われ、初めておびさんマルシェに出店したのだ。SINGERという相棒ができ、手仕事の大事さに立ち返ると、前に飛び出そうという気持ちが自然と湧いてきた。道行く人を呼び止め、名前を聞いてワッペンに刺繍して、手渡した。好



きな食べ物や動物のマークと一緒に名前を入れると、お客さんが大事そうに持って帰ってくれる。出店を重ねるうちに、ライブ刺繍と評判になり、何度も足を運んでくれるお客さんが増えた。名前を入れて販売する商品は、安物のタオルやTシャツから、縫製のしっかりしたハンドメイドの日用品に代わっていった。「がんばって技術を覚えたい分、安く使われたくないと思う職人気質はおじいちゃんと同じ。でも、ありがたいとごさいますという姿勢も大事。だからニュータイプの職人を目指すんです」。

年に何度か、神がかったゾーンに入る時がある。「突然ふわっと視野が広がって、ミシンと体が一体になるような感覚になるんです」。ミシンの話になると、少年のように目が輝く。

森田ネーム 高知市廿代町12-6



## まるで外国を 旅しているよう



小説家 1973年 山形県出身

### 小川糸

ちっちゃな町が好きで、路面電車に乗って赤岡を目指しました。町並みを歩くと、子どもたちが「こんにちは」と声をかけてくれたり、着物を着た男性がさっと現れて町を案内してくれたり、情緒がある。絵金の微細さ、フラフのダイナミックさ、そして、その色彩感覚に驚きました。その一方、高知市内はお店や若い人が洗

練されていて、おしゃれ。若い女の人がやっているお店がたくさんあり、とっても羨ましい。大都市に行く必要はないんじゃないかな。高知は、海にばあんと開いて、世界を見てるんでしょね。いろんなものを気前よく受け入れて、文化が成り立っていると感じました。



高知との縁 message vol.04

着物雑誌「七緒」の取材で2013年4月に初めて高知を訪れた糸さん。いつか高知が小説の舞台になる時が来るかも?!

# 戦国 元親くん

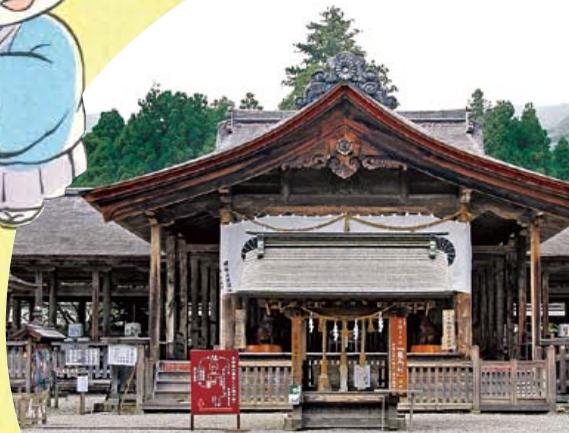
## 第4話

# 「神だのみ」

安芸氏、本山氏を破り、土佐統一へ動く元親。しかしその先には、長宗我部氏再興のきっかけを与えてくれた大恩人、しかも格の高い一条氏がいた。

### 2

元親は本山氏に焼かれた土佐神社の再建を果たし、「長宗我部ここにあり」を誇示した。



土佐神社：土佐国の中で最古と言われる神社。今は「しなね祭」など庶民に親しまれている。

1569年

再建された当日、社殿の柱の上部に文字が書かれていた。

あのような落書きを  
するとはげしからん！  
犯人を捜し罰しましろう

いや、土佐神社の再建は  
長宗我部再興の一里塚に  
なるだろうという  
神のお告げにちがいない

### 1

戦いは勝つだけでなく、常に大義がなければならぬ。「五摂家」と同格の土佐一条氏に刃を向ける難しさに元親は悩んだ。

なんと!?  
僕に矢を  
向けるのか?  
ハナヤケだめ!

いちじょうかねさだ  
一条兼定

えく、一条と  
戦わないといけないの??

元親

一条は  
恐れるに  
たりぬ

おおおお+

東：元親軍

四万ヶ川

西：一条兼定軍

### 4 1575年

洗札名：ドン・パウロ おおともそうりん  
一条兼定はキリシタン大名大友宗麟の娘を娶って豊後とのつながりをつくり、伊予の軍勢の協力を得て、元親軍を待ち構えた。

一条兼定殿が  
敗走致しました!  
追撃しましょう!

### 3

いよいよ一条氏と戦う時がきた。土佐神社に家来一同と出陣祈願する元親。

勝たせて!!

### 5

一条兼定は伊予の戸島に逃げ込み、そこで余生を送った。

いや止めておけ。  
戦は勝ちすぎない方がよい。

やったね!

土佐統一!!

# でんづき でんづき

vol. 04

©Yozo Oda



高知市丸ノ内緑地にて。「よさこい祭り」最終日、日陰で出番を待つ踊り子たち。この日はとても暑く、41℃になったところもあったそうです。

写真・文 織田 庸三 2013年8月12日撮影

## アゲアゲ 天国 vol. 4



澤禎朗さん、母の欽子さん、姉の和田恵子さん、甥の和田朋己さんと近所の人、総勢6人が手結餅を守る。

# 手結餅

「ていもち」

江戸時代、手結山にはお茶屋番所があり、参勤交代のため峠を越える藩主たちが足を休めた。道が舗装され、車で移動する今も、手結を通ると、ニツキの味を思い出す。

「次は、餅屋前」。下車ボタンを押してバスを降りると、目の前に古い日本家屋がある。家の引き戸を開けると、甘い香りが鼻に抜ける。使い込まれた杉の「ものぶた」に、小判型のお餅を並べる澤欽子さん(77)は、二十歳の時、芸西村から嫁いできた。「車のない時代、お町を出発したら、ちょうど昼ごろに手結に着いたそうです。たまに古い客が訪ねてきて、お茶を飲みながら嫁ぐ前のことを教えてくれた。

「餅屋は宿命。一子相伝の世界ですから」という長男の禎朗さん(51)は、七代目。製菓の専門学校を出て、25歳で家業に入った。「昔はうんと甘いのが喜ばれたけど、今は控えめ」。時代に合わせて、微妙に味を変える。かつて裏山にあったというニツキが、味の決め手。「代々受け継いできた味、守るだけやなくて、育てていかんとねえ」。禎朗さんが声をかけると、欽さんはえくぼをつくって笑う。まるでお餅のようだった。

正式名は「お茶屋餅」だが、通称・手結餅で親しまれている。(香南市夜須町手結1468)

お茶屋餅  
TEL:0887-55-2941  
FAX:0887-54-1468  
高知県香南市夜須町手結1468  
(有)澤餅茶屋



**教えて先生**

高知県立歴史民俗資料館  
梅野光興さん

非業の死を遂げた者が祟りをなし、疫病や災害をもたらすものを御霊と言います。津野山にも有名な風神鎮塚の中平善之進をはじめ、津野町芳生野の荒一や大古味太夫など無念の死を遂げ激しく祟った霊を各地で祀っています。高知市洞ヶ島に祀られている薫和尚は土佐を代表する御霊のスーパーstarです。何か災害が起きるとこれら御霊のせいにするのはもちろんですが、その強力な力が願い事もかなえてくれるというので、流行り神になることもあったようです。



# 二十日はつかねんぶつ 念仏 越

【伝説探訪】

梶原町越知面区には四〇〇年以上続く念仏踊りがある。戦国末期に殺された村の領主の御霊を弔い、念仏を唱え、踊る。



越知面領主の中越長左衛門は、一夜のうちに荒地を田畑にしたり、数時間で家を建てたりする魔術を心得ていた。これは村人を無意識のうちにこき使ったもので、騙されたと憤慨した村人たちは、長左衛門を殺害した。一五九七年七月二十日のことだった。

三年後、津野山郷を治めていた領主・津野親忠が切腹し、津野家が途絶えると、津野山は不況不作、天変地異に見舞われた。特に越知面村は酷く、村人が次々と命を落とした。これは暗殺した中越長左衛門の祟りではないかと恐れ、墓を祀り、殺された七月二十日に念仏を唱え踊るようになったという。

(参考：梶原町史・同町広報)



ミンミンゼミの鳴き声に、鐘の音が響く。神官、僧侶、区長、七つの集落の代表がずらりと並び、境内の真ん中に大太鼓が鎮座する。カラフルな衣装のトビ太鼓、袴袴をつけた団扇役が「ヤー」と声を上げて、定位置につく。「へんなーもーみい、どうばら」という声に、黒い鶏の羽根を頭に立て、長い馬毛を顔に垂らし、トビ太鼓が跳ねる。

踊り子は全て越知面区の男性。「年々高齢化していたが、今年は20代が2人。世代交代です」と区長の川上光章さん。初めてトビ太鼓を踊った山内孝信さん(25)は、「踊りの順序や、飛んだり跳ねたりするタイミングが難しかった。個別に何度も指導してもらったけど、全体練習をする時自分一人、違う動きをしていることもありました」と苦笑い。

祭り当日は、かつてトビ太鼓を踊った父も見に来た。「衣装も、節も、踊りも昔のままで、この地域に根差しているんだと実感しました。先人から受け継いだ踊りを、引き継いでいきたい」。準備や酒注ぎにまわる堂守(どうし)を二十年以上続けている川上原弘さん(84)は、祭りの長老。「大変やからと、昭和30年代にお祭りをやめたことがあった。その後、赤痢が大流行りした。祭りを止めたせいじゃと言うて、復活させた」。よさこい祭りが年々進化している一方、越知面区では、今も、四〇〇年前と同じような衣装を着て、念仏を唱えている。長左衛門の魔術が時を超えて、人々に宿っているのかのように……。





# 「ぶしからの贈り物」

アンケートに答えていただいた読者の方に、とさぶし4号の関連グッズを抽選でプレゼントいたします。今回の逸品は……

1



サイズ 295×200×95mm

とさぶし特注刺繍!  
あなたの名前が入ります!

森田ネームさんの刺繍入り  
ミニトートバッグ2名さま

今号の表紙「土佐あかうし」を刺繍。  
そして、当選者の方の名前も入れた  
世界に1つしかないミニトートバッグ。

2



かえるの形が  
かわいいよ～!

がんばれ高校生セット

- ・高知農業高校の行列のできるハム
- ・高知市立養護学校のヒノキまな板  
サイズ 445×225mm

2点セット 3名さま

3



市養市で大人気の  
『Rなイス』1名さま

4



小川糸さんの  
サイン入り新刊  
1名さま

応募締切：2013年11月末／応募はWebサイト <http://tosabushi.com>

Topページ **「ぶしからの贈り物」** から ※当選者の発表は、商品の発送をもってかえさせていただきます。

## information

とさぶし5号は、  
2013年12月24日発行を  
予定しています。  
とさぶしをお店や施設で  
配布いただける方は、  
[staff@tosabushi.com](mailto:staff@tosabushi.com)  
までお知らせください。

## 投稿 プレゼント 投稿大募集!!

「私は見た!」や  
「あれは何? 調査して!」  
など、高知の珍なものを  
教えてください。上記の  
メールに投稿ください。

例えば日曜市で、こんな会話が聞こえてきます。

「たまあ、あんた、まだやりゆうかね〜」  
（まあ、あなたまだやり続けてるんですか）

「そうよ〜。もう八〇歳になるけど  
じこじこやりよら〜ね〜」  
（そうですよ。もう八〇歳になるけど、  
地道に続けているだけです）

高知には、光が当たらなくとも、  
周囲に気をとられることなく、  
自分がおもしろいと思っただけを一途に、  
自分のペースでやり抜くような人が  
たくさんいます。

そういう土佐人の「しぶとさ」を伝えることが、  
二十代、三十代の生き方のヒントになり、  
新しい世代が文化の担い手になっていくと  
信じます。

とさぶし編集部



投稿 其の二

島崎 章娘 (就職アドバイザー)

青木 知佐 (スクールカウンセラー)

藤田 紀子 (幹)

りん (畜産総合科)

川村 明好 (用務補助)

土田 美鈴 (用務補助)

犬のおまわりさんならぬ、犬の先生?!  
なんとワンダフル! 高知農業高校の畜産総合科を  
訪ねると、職員室の扉から犬が顔を出していた。

おった……!

「ん?! 向こうの方が  
睡がしいワン!」

「なぜ  
学校に?」

「学校近くの水路で弱っていた  
ところを生徒に助けられたんだ。  
「りん」という名前をもらって、早9年。  
夜は畜舎で過ごし、  
日中は職員室にいるよ。」

仕事は  
苦情係  
!!

生徒たちが作った農作物や加工品を販売する  
「高農ふれあい市」は、大行列ができ  
お客さんが殺気立ってくることも。  
そこで、りん登場。  
笑顔でお迎えし、苦情を  
聞いているのです。

WEBの、りんギャラリー、  
コーナーもチェックしてね!

Illustration Junko Nakahira



りに会える  
今回は、  
11月23日(土)!

高農ふれあい市は年6回。  
りに会いに来てね〜。